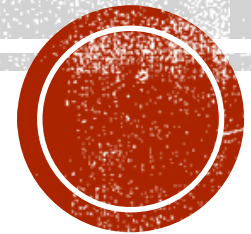


2014年12月6日（土曜日）

詭弁を学ぶ



原 聡一郎（文学部1年）

目次

- 勉強会の目的
- 詭弁とは？
- 時間的前後関係を論理的因果関係と取り違える誤り
- 性急な一般化
- 多義あるいは曖昧さの詭弁
- 藁人形攻撃
- 滑りやすい坂道の議論
- なぜ詭弁を使うのか？
- なぜ詭弁に騙されるのか？
- まとめ
- 参考文献一覧



勉強会の目的

- 詭弁を学ぶことで、詭弁に騙されなくなるだけでなく、相手の用いた詭弁を自らの議論の武器にすることができる。
- 詭弁を学ぶことで、詭弁を使うことのないようにする。
- 詭弁を学ぶことで、人間がものを考えるときの本質的な「癖」のようなものを見つける。



詭弁とは？

詭弁：外見上はもっともらしい推論で、形式上や内容上の虚偽を含み、
多くの場合相手を欺いたり、困らせることになる。(出典：広辞苑)

Cf) Sophism：詭弁、こじつけ、屁理屈。

Sophist：①ソフィスト《古代ギリシアの修辞家・哲学・倫理学などの教師》

②詭弁家、屁理屈屋

(出典：ジーニアス英和辞典)



詭弁には人を説得させてしまう効能がある？



時間的前後関係を論理的因果関係と取り違える誤り

「時間的前後関係を論理的因果関係と取り違える誤り」とは

A、Bという二つの事件が連続して起きたとき、**AをBの原因としてしまう誤り。**

例)

テスト成績の悪い生徒を叱った（罰）。すると次のテストで、叱った生徒は高得点を取った。つまり叱ると成績が上がる。



テストの成績が上がった原因は、叱ったこと（罰）としてしまう。

（他に何らかの原因があったことを考慮していない。）



性急な一般化

「性急な一般化」とは

少数のあるいは不適切な事例の観察から、それらの事例にみられる性格を、それらを含む**母集団全体の性格と決めつけてしまう詭弁**のこと。

例) ○×大学の大学生が万引きを行った。

「○×大学の大学生は本当に質が悪いな。」

某国の国民が反日運動を起こし、大暴れしている。

「某国の国民はなんて野蛮なんだ。」



万引きや暴動を起こしたのは一部。**一部の行動をすべてのものにあてはめてしまう。**



多義あるいは曖昧さの詭弁

「多義あるいは曖昧さの詭弁」とは

議論や論証の中にあられる言葉が**複数の意味で使用**されること。

また何を指すのかが、**はっきりしないまま用いられる**ことによって、議論に不正を生じさせる詭弁のこと。



例)

教師はジュースではなく水のようにあるべきだ。
ジュースは美味しいが、生きていくには必ずしも必要ではない。水はジュースほどおいしくはないが、水がなくては生きてはいけない。



解説

- 「水」という言葉は二回表れる。
- 一回目に出てきた「水」という単語は、無色、無味、無臭のいわゆる「真水」を指す。
- 二回目に出てきた「水」という単語は、「水分」一般を指している。
- つまり、一回目の「水」という意味であれば、「なくては生きていけない」ということはない。
- 二回目の「水」意味であれば、「ジュースほど美味しくはない」とは限らない。
(水分を指すのであるのならば、ジュースも含まれるため。)



語句の曖昧さが誤った論証をもたらす可能性は十分に考えられる。そうさせない(ならない)ようにするため、予め定義づけておくことが大切。



藁人形攻撃

「藁人形攻撃とは」

相手の主張を、こちらが反論しやすいように（故意に）歪めて表現する詭弁。

例1)

A「小学校の国語教育では、まずしっかりと漢字を覚えさせることが重要だ。」

B「では、あなたは漢字さえ書ければそれでよいと言うのですか。」

例2)

A「イギリス人は、演劇に関しては、世界最高の国民だ。」

B「いいや、よく知られているように、彼らは音楽では、したがって歌劇では、何の業績も上げることができなかった。」



解説

- 例1) 「〇〇をすべき」と言ったとき「〇〇のでありさえすればいいのか」と言い返す。
- 相手の主張を単純化し、極論に変貌させ、愚劣で脆弱なものへとすり替えてしまう。
- 例2) 「演劇」という中に含まれる音楽、舞踊などの要素を、議論（反論）に含ませる。
- 相手の主張を拡大し、それを破綻に追い込むことを目的とする。
(自分の主張はそれとは反対に、適応範囲を狭く限定した方が、安全である。)



言葉の解釈を使い分けることによって**相手を破滅に追い込ませようとする**こと。



滑りやすい坂の議論

「滑りやすい坂道の議論とは」

最初の一步を踏み出すと、いつの間にか逃れられないような厄介な帰結の連鎖に巻き込まれ、そのうちになぜか破滅的な結末に向かって加速をつけながらまっしぐらに突き進む羽目に陥ると警告するような議論。

(ダグラス・ウォルトン著書『滑りやすい坂道の議論』より)



例)

学生「『論理学』の単位がないと看護学校を卒業できないので、単位を出してください。」

教師「君は百点満点の試験で五点しかとっていないのでとてもじゃないが単位はやれない。」

学生「しかし出席点というものがあるでしょう。」

教師「君は、授業中化粧を直したり、雑誌を読んだりそんなことばかりしていたではないか。出席点なんかやれるか。」

学生「それでは、先生は、私に卒業するなというのですね。今看護師不足なのはご存知でしょう。一人でも多くの看護師が必要な時に、私に看護師になるなというのですね。看護態勢の遅れで何人死んでも構わないというのですね。」

(『論理病を治す!』P79から引用)



解説

- 『論理学』の単位がもらえない



- 看護学校を卒業できない



- 看護師が不足する



- 看護態勢に遅れが生じる



- 病人やけが人が十分な看護が受けられない



- 病人やけが人が何人も亡くなる（それでもいいか？そうでなければ単位をよこせ）



因果関係や連鎖関係自体は詭弁ではない。もし看護師になれないことが、けが人や病人の死につながるのであれば、論理的に正当な議論である。

しかし、その因果関係が、「風が吹けば桶屋が儲かる」式にこじつけていて、明らかに恣意的につなげられるときに、その「論法は滑りやすい坂道の議論」と判断される。

この議論を作るときは、初めから因果もどぎの推論を一つ一つ連ねる必要はない。不都合な到着点を定めて、あとからそれに向かって理屈をこねればよい。

例)

軍備を増強、拡大する。

↓

？

↓

？

↓

戦争が起こる（だから軍備を増強、拡大するな）

あらかじめ問題になるような帰結を先に定めて、「？」の部分に適切な理屈をつければよい。



なぜ詭弁を使うのか？



論より人が気に食わない

人に訴える議論とは、ある人物に対して、その議論の妥当性を問うのではなく、その人の人格、発言の動機、実際の行動や過去の発言との整合性等を問題にすることで、議論そのものを否定しようとする。

言葉は常に誰かの言葉として現れ、現象的には人と論を切り離すことはできない。そして、人は論の一部となり、正しさを論証するための根拠を補完する。



つまり、人と論とが内容的に関係すると考えられるときにのみ、人を内容の評価に参加させている。

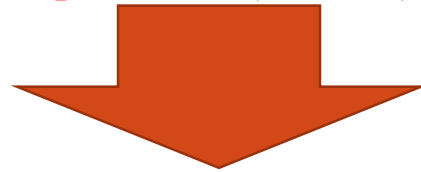


自分自身が正しい

「AとBの二つの意見が対立したとき、Aは自分の側に誤りがあることを懸念し、その考えを見直したりすることはせずに、間違っているのはBであると決めつけてかかる。」

(アルトゥール・ショーペンハウアー『正しくあり続ける技術について』より)

ショーペンハウアーは、この性質を人類生来のものとし、
この性質は知力に関するときにとりわけ敏感となると述べている。



自分の知的虚栄心を満足させるためには、どんな手を使ってでも議論に勝とうとする。



なぜ詭弁に騙されるのか？



なぜ詭弁に騙されるのか？

詭弁に騙される人は、単純だから騙されるのではなく、人間の思考がそのようなものを受け入れてしまうような癖を持っているから騙されるのである。

詭弁に騙される人々は、詭弁に騙されるほど知的でかつ論理的である。

自然現象や、社会現象が当たり前前に起こることを、当たり前前に信じていることができる程の知性を十分に持ち合わせている。



ゆえに、自分自身の身の回りに起こる出来事を、単なる偶然として受け止めることができずに、何らかの因果関係や相関関係を求めずにはいられない。



非合理的なものへの恐れ

人間はどんなに科学化され、啓蒙され、合理的精神を備えるようになったとしても、**心の中にある非合理的なものに対しての恐れを払拭することができない。**

例)

- 神様や、霊魂
- 前世からの因縁
- 神聖な場所で行った罰当たりな行為に対する罰



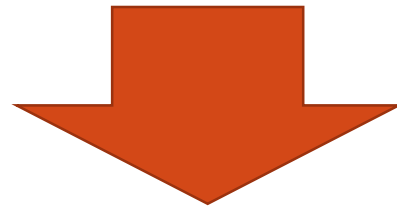
非論理的なものを畏怖する側面が詭弁に騙される原因となりうる。



性急な一般化の原因

事例は一つの逸話として興味深いお話として語られることが多いので、それを聞いた人間の印象に残り、意識しないままその事例を一般化してしまう。

また「性急な一般化」を犯すとき、私たちはすでに「性急な一般化」を犯している。



そもそも、「性急な一般化」を犯す前に、すでに偏見により「性急な一般化」をなされ、また、興味深い偏見の話や議論が出ることにより、再度「性急な一般化」をしている。



詭弁が働くとき

どちらかが正しくどちらかが間違っているときには働かない。

言い換えれば、**どちらも可能性として起こりそうなときに詭弁が働く。**

詭弁が働くときは、**どちらが正しいかわからない、あるいはどちらが正しいとも言えるような問題だけである。**



人間は、**正しいと思って理論的な誤りを犯し、正しいと思って理論的な誤りを受け入れてしまう。**



まとめ

詭弁を使うとき

- 自分自身の正しさを証明したい欲。
- そもそも論以前に相手自身が気に食わない。

詭弁に騙されるとき

- 人間が論理的ゆえの仕方なさ
- 人間自身の根本的な精神に持つ恐れ
- 偏見や、その偏見を助長するような話題
- 両方に正しさ(曖昧さ)があるがために効果を発揮する。



参考文献一覧

- 香西秀信（2009年）『論理病をなおす！－処方箋としての詭弁』ちくま新書
- 香西秀信（2007年）『論より詭弁 反論理思考のすすめ』光文社新書
- 香西秀信（2010年）『レトリックと詭弁－禁断の議論術講座』ちくま文庫
- 野崎明弘（2007年）『詭弁論理学』中公新書
- 阿刀田高（1993年）『詭弁の話術 即応する頭の回転』角川文庫



ご清聴ありがとうございました。

